

日本語会話にみられる『共話』の特徴 日本人とアメリカ人によるあいづち使用の比較から

久保田真弓

The characteristics of "Kyowa" as a Japanese Conversation style,
based on the comparisons of the use of backchannels
by bilingual Japanese and Americans

Mayumi Kubota

Abstract

In this paper, the use of backchannels were investigated in relation to language and culture, based on twenty-four conversations in English and Japanese by twelve American bilingual persons; and twenty-four conversations in Japanese and English by twelve Japanese bilingual persons. The backchannels included in this study are 1) head nods alone; 2) joint responses with head nods and short verbalizations; 3) short verbalizations alone; 4) long back channels; and 5) non-verbal behaviors.

The statistical analysis revealed that both Japanese and Americans use more joint responses when they talk in Japanese than in English. By presenting the several cases, the results were discussed in relation to the Japanese characteristics of the conversation style called "Kyowa." The term "Kyowa" was created by Mizutani (1988) in contrast to English conversation style "Taiwa (dialogue)" and was defined as the conversational style where sentences are constructed in cooperation by two participants. The frequent use of joint responses in Japanese conversation by American persons could be attributed to her/his acquisition of communication competence for surviving in Japan.

はじめに

留学生を対象とした日本語教育では、「話す」ことだけでなく「聞く」ことも重視した会話の指導に変化してきている。そのなかでとりあげられているもののひとつに「あいづち」がある（久保田, 1996）。「相槌」とは、周知の通り、もともとは鍛冶屋の師弟が互いに鎚を持ち「カッチン、カッチン」と打つことで、そこから人が話しているときに聞き手が相手に調子を合わせてうなずいたり、「ええ、ええ」などと「あいづちを打つ」ことを指すようになった（広辞苑）。

二人の会話つまり対人コミュニケーションの視点から、このあいづちの定義を見直すと「師弟が」という点と、「カッチン、カッチン」平等に音を出し、かつ「相手に調子を合わせる」という点が、日本人のコミュニケーションの特徴を考えるうえで重要な鍵概念となる。

日本の文化のなかでは、知識や権力、権威は経験を積んできた年長者にあり、どちらかという年齢や経験といった要素が重視される。そのため日本文化は当然の成りゆきとして「なる」、または「なった」境遇をよしとしてそのまま受容する価値観を重んじる「なる・ある」文化だといわれている（Kluckhohn & Strodtbeck, 1961; 荒木, 1885）。「なる・ある」文化では、「甘え」や「縦関係」などを基本にした「人間関係」に配慮したコミュニケーションを好む。したがって日本人同士の対人コミュニケーションの場合では、何を話すかという「内容面」ではなく、いかに話すかという相手との「関係面」を重視した話し方をする（岡部, 1988）。

それは日本語での会話と英語での会話にも反映されている。水谷（1988）は、日本の日常会話はアメリカの「対話」型とは異なる「共話」型をとると指摘している。「共話」とは、話し手と聞き手という区別もなく、互いに相手の話を完結し合う会話のやりとりで、相手の話を促すだけでなく、聞き手が相手の話をひきとって、一緒に会話を進めていき、あたかも二人の会話が一本の線のようにつながっていくものをさす。それに対して「対話」とは、二人が相対して、それぞれの考えを述べ、問いを発し、その問いに答える形の話し方をさす。

したがって日本人の日常会話では、話し手と聞き手が一緒になって会話を作り出すというニュアンスがアメリカ人の会話より強いことが分かる。そこで師弟関係であっても会話を楽しむうえで互いに協力して「カッチン、カッチン」と話を組み立てる姿勢があり、そのような会話に参加するためには、あいづちが重要な機能を果たしている。最近の知見では、あいづちの機能として「聞いている」「理解した」というもの以外に会話の流れをコントロールする積極的な働きがあることが指摘されている（大浜, 山崎他, 1998）。このような日本語の「共話」と英語の「対話」という会話の持ち方の相違の背景には、日本の「なる・ある」文化とそれに対するアメリカの「する」文化という文化的価値観の違いも影響していると思われる。しかし「共話」的な話し方と「対話」的な話し方は、日本語と英語という言語による相違から起こるものなのか、話者の文化的背景からくる価値観の相違から生まれるものなのか

は明らかではない。

そこで本稿では、「あいづち」に焦点を当て、アメリカ人と日本人によるあいづち使用を会話時における使用言語と話者の文化との関係からを数量的に比較するとともに、特徴的な事例について使用言語と文化的特徴から考察を加える。

1. あいづちに関する先行研究

1.1 あいづちの特徴と文化との関係

あいづちを打つには、話し手に対して聞き手が「ええ」「うん、うん」などという音声言語のみで表すことも、黙ってうなずいたり、微笑んだりして非言語のみで表すこともできる。一般に言語と非言語における関係では、非言語メッセージは、言語メッセージの「代用」として使われたり、言語メッセージを「補足」、「強調」するために使われたりする。

またときによっては言語メッセージを「否定」するメッセージが非言語によって表されることがあり、言語と非言語のメッセージが相容れず矛盾しているときは、人は言語メッセージより非言語メッセージの方を信じる傾向にある (Burgoon, 1985)。さらに身体動作、たとえばうなずき、瞬き、視線の動きなどは発話調整動作 (regulator) としての機能もあり、エクマンとフリーゼンによると話し手の話を継続させたり、繰り返させたり、急がせたり、詳しく述べさせたりして会話の流れを調整するものと定義されている。そしてこれらの動作は、ほとんど無意識的に行われているという点に特徴がある。したがってこのような動作は、意志によって抑制するのは困難で反復学習によってのみ習得される。ただし意識的に使用することもあり、対話者はいつも通りに使われていれば気がつかないが、いったんなくなると違和感を感じる (Ekman & Friesen, 1969)。したがってあいづちと一言でいっても無意識に出てしまうものから意識的に利用できるものまでであると考えられる。美容師など相手の話を聞くことが仕事の一つである職業では、うなずいているだけでは相手に見えないので意識して音声によるあいづちを多用している (久保田, 1991)。以上のことからあいづちは、言語と非言語の特徴をもち、かつ発話調整には欠くことのできない動作であるといえる。

あいづちは、英語では、"back-channel"または "listener's response" といわれ、話し手からのメイン・チャンネルに対して聞き手からのバック・チャンネルまたは聞き手の返答と捉えられている。したがってこのような用語の使い方の違いからも英語の会話では、話し手が主となり会話を進行させ、聞き手がそれに対応している「対話」の形が浮かぶ。

さらに文化によっては、会話を楽しむことは、その話す「内容」を楽しむことなのか、相手との「関係」を保つためなのかという点で比重の置き方が異なっている (岡部, 1988)。例えば、アメリカでは歳をとっても若者と同じ色合いの服を着て若さを強調し、常に新しい変化をもとめる姿勢や未来に向かう活動性が高く評価される。これは日本の「ある・なる」文化とは異なる活動志向で「する」文化だといわれており、このような文化では、人種、民族、階層、年齢、

地位、性別に関係なく、互いに「個」を尊重し、話す「内容」によって相手とのコミュニケーションを楽しむことに価値を置いている。ときには意見も食い違い論争になるが、そこでいかに相手を説得するかが、また学問になるほどのわざなのである。したがって、賛否両論の問題をディベートとして、自分の本当の感情とは別に賛成派や反対派のどちらの立場になっても論破することを楽しみを見いだすことができる。つまり会話も「内容」を重視し、相手との「対話」を楽しむことになる。

それに対して日本では相手との「関係性」を重視して話を進めるため、自分の感情と切り離してディベートを楽しむことは苦手とされている。これは日本人学生だけでなく、アジア圏からの留学生も抵抗を示す点である。自分が信じている賛成意見、または反対意見は述べられるが、自分の意見とは反対の側の立場にたって論述することは非常に難しいのだ。また反対意見をいわれると、「内容」に対してではなく相手との「関係」面でとらえてしまい、人格的に傷つけられたと感じてしまうことがある。

このように文化的価値観の相違から会話にのぞむ姿勢も異なることがわかる。

1.2 あいづちの機能と言語との関係

これまでのあいづち研究では、あいづちの表現形式や機能、あいづちを打つタイミングおよび頻度について分析がなされている。

日本語でのあいづちの機能としては、堀口（1988）が指摘した5つの分類、(1) 聞いているという信号、(2) 理解しているという信号、(3) 同意の信号、(4) 否定の信号、(5) 感情の表出、に松田（1988）が追加した(6) 間をもたせる、がある。さらにメイナード（1993）は、「情報の追加、訂正、要求などをする表現」をつけ加えている。そしてザトラウスキー（1993）は、電話での勧誘表現を分析し、あいづちを「注目表示」という発話機能として扱い、それを11種類に分けている。このように日本語のあいづち機能に関しては研究者によってどの程度細かく分類するか、それをどのような用語でまとめるかにおいて多少の相違が見られる（堀口, 1997）。英語におけるあいづちの機能としてはこのうち相手の話を「聞いている」「了解した」という働きのあること（Fries, 1952; Kendon, 1967）および発話交替におけるうなずきや視線、"yeah"など短いあいづちの役割が指摘されている（Duncan & Fiske, 1977）。

表現形式に関する日本語のあいづち研究では、うなずきのほか「ええ」「うん」など短い言語表現を伴うものや相手の話を一部繰り返したり、言い換えたり、相手が始めた文を先取りし、完結するものが取り上げられている（堀口, 1988; 松田, 1988; 水谷, 1983）。一方、英語のあいづち研究では、うなずきや短い音声表現である"yeah"や"uh-huh"などのほか、視線、笑いなどの非言語メッセージが取り上げられている（Yngve, 1970; Kendon, 1967; Duncan & Fiske, 1977; Brunner, 1979）。また広義のあいづち（long back channel）と称して、相手が始めた談話を完成したり、言い直したり、不明な点を聞き返すもの（Duncan, 1972; Duncan & Niederehe,

1974) まで聞き手の反応 (back channel) として含めているものもある。

あいづちにおける日米の比較研究で共通して取り上げられてきたのは、あいづちの頻度についてであり、日米比較では、日本人がアメリカ人より約2倍多くあいづちを打つことが明らかにされている (Maynard, 1986; White, 1989)。さらにあいづちを打つタイミングとしては、メイナード (1993) が話し手の文の切れ目や「ね」「よ」などの終助詞や間投詞のところ、さらに話し手の頭の動きのところでも多く行われていると指摘している。そして日本語は聞き手めあての表現が多いため、あいづちが多く表れるのではないかと述べている。

日米におけるあいづちの頻度の違いをこのように使用言語の特徴や話し手との関わりから説明するものがあるが (水谷, 1983; Maynard, 1986; White, 1989)、音声のみを分析対象にしていたり、初対面の日常会話やテレビ番組の対談をデータとしているものが多く、資料として少々偏りがある。またこのような日米比較では、日本人の日本語による会話とアメリカ人による英語による会話の比較が多く、日本語や英語を第2言語として話す会話の比較は、まだ数少ない (White, 1989)。

1.3 あいづちの定義と分類

本稿では、あいづちと使用言語や文化との関連を調べるため、聞き手が積極的に聞き返したり、繰り返したりする広義のあいづちも含め、あいづちを「話し手が発話権を行使している間に、聞き手が話し手に送る言語、非言語の行動を含んだ信号」と定義し、次の5つに分類した。

(1) うなずき (頭の縦振り)

頭の縦振りのみのあるあいづちの場合。ただし頭を上下または上下に一回動かすものから継続して何回も動かすものまで含む。

(2) 同時あいづち

「ええ、ええ」など短いあいづちを音声で示しながら頭を縦に振る場合。

(3) 短音声あいづち

「ええ、ええ」というような短いあいづちを音声のみで示す場合。例えば次のようなものが含まれる。

a) 支持：英語の場合 "m," "mhm," "yes," "yeah," "right," "okay," "fine,"

"I know," "that's right," "I see," など

日本語の場合 「ええ」「はあ」「はい」「うん」「ふん」

「ほおほお」「なるほど、やっぱり」など

- b) 感嘆：英語の場合"oh,""gosh,""good,"など
日本語の場合「やだ」「そう」「まあ」など
- c) 感嘆の疑問：英語の場合"what,""really,""did he,""what is" など
日本語の場合「ほんとうに」「そうですか」「そうでしょうか」

(4) 広義のあいづち

- a) 文の完結：話し手が始めた文を聞き手が完成させる場合。
- b) 言い換え：話し手の言葉を聞き手が言い換える場合。ときには聞き手の意見も含まれる。
- c) 聞き換えし：話し手の不明な点を聞き返す場合。
- d) 繰り返し：話し手の言葉、またはその一部を繰り返す場合。

(5) 非言語動作

頭の縦振りを除いた非言語動作のうち頭の横振り、笑い、微笑み、しかめ面によるあいづちの場合。

以上のように5つに分類した理由は、うなずきなどあいづちの一部は発話交替の際にみられること (Duncan & Fiske, 1977)、とくに広義のあいづちが頻繁に使われると、うなずきや「同時あいづち」など他のあいづちへの影響が考えられること (久保田, 1994) があるためである。また非言語動作をひとまとめにしたのは、他の4つの分類に入らないあいづちという意味で、特に聞き手の顔に笑みが浮かんだり、話し手と一緒に笑ったり、笑いながらあいづちを打ったりする場合、話し手に「聞いている」「おもしろい」という意味を伝達するうえではあいづちの機能を果たしていると思われるためである (Brunner, 1979)。

調査方法としては、あいづちと使用言語や話者の文化との関係を概観するため、5つに分類したあいづちの発生頻度を数量分析し、その結果を談話分析からの視点も加え考察、検討する。このような手法をとることにより、先行研究との比較を可能にし、さらに計量分析の結果を手がかりに談話分析することによりあいづちにおける言語と非言語の関係や意味が見いだせられるからである。

2. 調査方法

2.1 被験者

被験者として関西地区に住む日本人12名 (男6名、女6名) とアメリカ人12名 (男10名、女2名) を事前調査し抽出した。抽出基準としては、アメリカ人は、日本に1年以上滞在しており、ACTFLのガイドラインの日本語能力 (特に話す力) が中級以上の者、日本人はアメリカ

に1年以上滞在したことがあり英語能力（特に話す力）が中級以上の者とした。その結果被験者は表1のようになった。

表1 被験者リスト

被験者						
日本人						
番号	コード	性別	年齢	滞在年数	米国での滞在最終年	
1	J1	M	21—25	3.5	'87	
2	J2	M	26—30	4.0	'93	
3	J3	M	21—25	4.5	'90	
4	J4	M	26—30	2.0	'96	
5	J5	M	16—20	2.0	'90	
6	J6	M	16—20	2.0	'92	
7	J7	F	16—20	3.0	'92	
8	J8	F	21—25	1.0	'94	
9	J9	F	16—20	6.0	'90	
10	J10	F	21—25	4.5	'94	
11	J11	F	41—45	4.5	'94	
12	J12	F	16—20	1.2	'93	

被験者					
アメリカ人					
番号	コード	性別	年齢	滞在年数	
1	A1	M	26—30	4	
2	A2	M	41—45	14	
3	A3	M	26—30	4.5	
4	A4	M	31—35	6	
5	A5	M	26—30	3	
6	A6	M	26—30	3	
7	A7	M	31—35	5	
8	A8	M	26—30	3	
9	A9	F	51—55	26	
10	A10	F	26—30	7	
11	A11	M	26—30	3	
12	A12	M	26—30	3	

2.2 方法

二者による会話を実行するため、アメリカ人と日本人を同じ国籍同士で、第2言語学習国での滞在年数等を加味して筆者が二人一組みの組み合わせを指定した。表1のコード番号でいう

とアメリカ人の場合は A1とA2、 A3とA4、日本人の場合は、J1とJ2、 J3とJ4、という順である。

あいづちを引き出しかつ他の要因を極力排除するため会話はタスクのあるものとした。まず、一組の一人A1が別室に用意したビデオテレビで30分のホームドラマのうち前半8分を見て、それを元の部屋に戻り相手A2に10分で話して聞かせる。次に話を聞いたA2が別室で同じホームドラマの後半8分を見て、同じ相手A1に話して聞かせる。これをひとつのセットとし、アメリカ人の場合は、第一セットで英語のホームドラマを見て英語で話し、第二セットで日本語のホームドラマを見て日本語で話してもらった。日本人の場合は逆に、第一セットで日本語のホームドラマを見て日本語で話し、第二セットで英語のホームドラマを見て英語で話してもらった。

被験者への指示としては、会話を始める前に、テレビドラマは約30分あり、そのうちの冒頭部と終結部8分ずつを見ること、およびドラマの中心部分は見ないことになるのでその部分を推測して話すよう伝えた。また各セットの会話終了後、実験者がドラマの内容や主旨について質問することも被験者に事前に伝えた。

撮影は、大学の施設であるスタジオを利用し、カセットテープレコーダー、ビデオカメラ2台、マイクを被験者の横に設置し、照明はスタジオ全体に当てた。同じ組による英語と日本語の会話をカセットテープに録音すると同時に話し手と聞き手の上半身を同時にスプリット画面にビデオ録画し、コード番号も同時に録画出来るようにした。会話進行時には被験者の2名を除いて誰も同室しなかった。

本調査ではこのビデオ録画したアメリカ人被験者12名、日本人被験者12名により採集したデータの一部で英語と日本語会話の始めの3分ずつ合計144分の画像、録音テープより会話を転写し、次の手法でコード化したものを分析の対象とする。

2.3 コード化

転写した会話に5分類したあいづちを記録し、発生頻度を数えた。その際あいづちにもいろいろな形態や長さのものが認められたが、一回に起きたあいづちはひとつとして数えた。例えば、頭の振り方は、人により動かし方、速さ、長さが異なる。また一回のあいづちに頭を一回縦に振る者もいれば、話し手が話すいくつかの音節にわたって続けて何回か振る者もいる。音声によるあいづちも「ええ」と短いものもあれば「ああはあはあはあ」と長く続けて言う者もいる。しかしそれらは計量分析では同等に扱い一回として数えた。

3. 計量分析結果

使用言語を独立変数、5つに分類したあいづちを従属変数とし、まず日本人によるあいづち

について、それぞれ日本語で話した場合と英語で話した場合とでペア t 検定を行った。アメリカ人によるあいづちも同様の ペア t 検定を行った。

その結果、使用言語とあいづちの関係について、次の点が明らかになった。日本人が日本語で話した場合、英語で話した場合より統計的に有意にあいづちが増えること $t(11) = -2.76, p = .019$ 、とくに「同時あいづち」が増えることがわかった $t(11) = -2.52, p = .028$ 。

アメリカ人の場合も日本語で話した場合、英語で話した場合より統計的に有意に「同時あいづち」が増えていることが明らかになった $t(11) = -3.57, p = .004$ 。また非言語動作は日本語で話した場合、英語で話した場合より減っていることが分かった $t(11) = -2.78, p = .018$ 。アメリカ人による非言語動作で英語の会話に顕著に表れたものは笑みや笑い、さらに笑みを浮かべながら "right" など短音声あいづちを打つものであった。5 分類したあいづちの使用頻度の平均、標準偏差および使用言語との関係は、表 2 の通りである。

表 2 5 分類したあいづちの平均と標準偏差

日本人による日本語と英語の会話の場合

あいづち	言語	平均	標準偏差	T	確率
うなずき	日本語	17.50	10.28	0.59	0.568
	英語	15.17	10.28		
同時あいづち	日本語	21.50	14.68	2.52	0.028*
	英語	11.92	10.38		
短音声あいづち	日本語	5.08	5.68	-1.09	0.300
	英語	7.17	5.83		
広義のあいづち	日本語	2.17	2.17	-0.20	0.843
	英語	2.33	2.64		
非言語動作	日本語	2.58	3.18	0.36	0.723
	英語	2.25	1.42		
合計	日本語	48.83	14.48	2.76	0.019*
	英語	38.83	10.37		

n=12, *p < .05

アメリカ人による日本語と英語の会話の場合

あいづち	言語	平均	標準偏差	T	確率
うなずき	日本語	14.25	14.11	0.10	0.923
	英語	14.00	10.27		
同時あいづち	日本語	14.58	10.39	3.57	0.004*
	英語	8.75	6.92		
短音声あいづち	日本語	4.58	4.41	0.00	1.000
	英語	4.58	3.78		
広義のあいづち	日本語	3.5	3.06	0.00	1.000
	英語	3.5	2.24		
非言語動作	日本語	1.58	1.73	-2.78	0.018*
	英語	3.16	2.25		
合計	日本語	38.50	15.67	1.27	0.230
	英語	34.00	11.43		

n=12, *p < .05

次に国籍を独立変数、5つに分類したあいづちを従属変数とし、日本人とアメリカ人によるあいづち使用の違いを分散分析(ANOVA)で調べた結果、あいづち使用頻度総合計で日本人は1人平均48.83回、アメリカ人は1人平均34.0回あいづちを打っており、日本人とアメリカ人では、あいづちの総合計で差がみられ {F(1,22)=7.762, p=.011}、日本人はアメリカ人よりあいづちを多用していることがわかった。日米の比較では、日本人はアメリカ人よりあいづちを多く使用するという結果が、メイナード(1993)、水谷(1998)、ホワイト(White,1989)らで報告されており、本調査でもそれが実証された。

さらに同時あいづちが日本人に顕著に多く使われていることが明らかになった {F(1,22)=7.406, p=.013} (表3参照)。

表3 5分類したあいづちの国別分散分析

あいづち	SS	df	MS	F	F PROB
うなずき	73.500	1	73.500	0.696	0.4131
同時あいづち	975.375	1	975.375	7.406	0.0125*
短音声あいづち	1.500	1	1.500	0.065	0.8019
広義のあいづち	10.667	1	10.667	2.200	0.1522
非言語動作	2.042	1	2.042	0.2696	0.6088
合計	1320.167	1	1320.167	7.762	0.0108*

*p < .05

4. 考察

4.1 事例にみる「同時あいづち」

本調査では、あいづちのなかでもとくに「ええ」など短い音声を発しながらうなづく「同時あいづち」の使用がアメリカ人と日本人の両方の場合とも日本語で話したときの方が英語で話したときより顕著に表れることがわかった。つまり5分類したあいづちのなかでは、特に「同時あいづち」が使用言語と密接に関連していることが分かった。また母国語による日本人とアメリカ人とのあいづちの比較でも使用頻度の総和が違うだけでなく、日本人による「同時あいづち」の多用が著しいことが明らかになった。そこで本調査のように一方が見たテレビドラマの内容を積極的に聞くという場面における「同時あいづち」についていくつかの事例をもとに考察する。日本人がアメリカ人よりあいづちを多用する理由としてメイナード(1993)は、使用言語によってあいづちを誘因する要素が異なることをあげている。メイナード(1993)の日本人同士、アメリカ人同士各20組による3分間の日常会話を比較したデータによると日本語では、文末のポーズ付近で51.02%、終助詞や間投詞付近で40.84%、付加疑問の付近で7.85%、話し手の頭の動き付近で38.08%表れるが、英語では、82%が文末のポーズ付近に表れ、その他に付加疑問の付近で6.97%、話し手の頭の動き付近で7.78%表れている。つまり日本語と英語の大きな違いは、日本語には助詞があることであり、それがあいづちを誘因する原因のひとつになっているという。文末に表れる終助詞もは、疑問を表す「か、かい、かね、かしら」、確認・同意を表す「ね、さ」、知らせを表す「よ、ぞ、ぜ」、感嘆を表す「なあ、わ」、記憶の確認を表す「っけ」、禁止を表す「な」等がある。そして終助詞のうち「ね」と「さ」は、文中の切れ目に挿入して、聞き手の注意を促す働きをするため間投詞ともいわれている。会話のデータのうちポーズで区切られる語句の多くは、このような助詞を伴っていることが多く、つぎのような話し方になっている。

(ペットの犬の毛についての会話)

B: そうだね / なんか / それもさ / 夏だからでさ / 何かねえ / 結局ねえ / 短く刈っちゃってね。 (メイナード, 1993, p.99)

メイナードによると、このように日本語には英語にはない助詞があり、あいづちを誘因する要素が異なるから日本語による会話にはあいづちが多用されるのではないかという。

さらにメイナードの調査では、話し手の頭の縦の振りにも注目し、日本語では、話し手も会話の流れをコンマやピリオドで切るように頭を動かし、話し手が発話の最後のシラブルと同時に送る頭の動きにあわせて聞き手のあいづちがみられることを指摘している。

そこでこのような日本語と英語ではあいづちを誘因する談話上のコンテキストが異なることを念頭に置き、「同時あいづち」が日本語と英語の会話ではどのようにあらわれているのか実

例2は、アメリカ人による男性同士の日本語による会話である。この会話でも聞き手は話し手の話しに合わせてあいづちをうっており、頭の動きも伴った「同時あいづち」になっているものが多い。ただし頭の振り方が日本人のように一回、一回区切れるはっきりした縦の完結型の頭の振りではなく、アメリカ人的な連続型のため、少々ぎこちなさが見られる。久保田(1993)では、アメリカ人と日本人のうなずき方の違いについて指摘し、使用言語を英語から日本語に変えても頭の動かし方は極端に変わらないことを述べた。例2でもタイミングとしては日本人と同様にひとまとまりの語句のところであいづちが打たれているが、頭の動きが日本人のようにはぎれのよい完結型ではないので、違和感が残る。

Bのあいづち総数は51回でそのうち「同時あいづち」は29回であった。この会話に続く部分で、BはAの話しの内容が細かすぎてドラマの流れの全体がわかりにくくなるためいろいろ質問をすることになるのだが、それまでは我慢して相手に合わせるというような感じであいづちが打たれている。

水谷(1988)が提唱した「共話」は、このように会話の当事者が協力して一定のリズムを保ち、話し手がこの辺であいづちを要求するだろうというところでタイミングよくあいづちを送ることで、会話を滞りなく進行させることである。水谷(1995)によると、大学や日本語学校などで組織的、体系的に日本語を学んだ人の多くは、この共話的な話し方は学習しにくいと感じている。その一方で、相撲界の曙のように日本の社会で実践的に身につけた人やテレビなどで活躍している外国人はたいてい共話的な話し方が身に付いている。この背景には「発言は相手と共同で作るものであって、自分一人で作るものではない。」という考えがあり、そうした考えが可能なのは、話し手と相手が共通の理解を持ち、有る程度共通の地盤に立っているからである(水谷,1995)。例2の話者も実践が先立って日本語を学習した者である。その意味でかなりリズムカルにあいづちが打たれている。しかし完全に日本人と同じようなうなずき方にはなっていない。

例3 日本人による男性同士の会話 (20秒)

- (3.1) A: 話しを聞くと息子がやっぱり/ (間)
- (3.2) B: どういう話しをしたか言っていました? (話者交替)
- (3.3) A: あのー/一年間を/振り返った話しなんですけど
- (3.4) B: うんうん、そこんところ
- (3.5) A: 息子の それが
- (3.6) B: 一番おもしろそうだなあ

do you call it.. er... T-shirt with/...um.. / kind-of plaid shirt over it, like

~~~~~  
a flannel plaid shirt and her hair's kind of a mess and finally she puts on

(4.2) B: un

← a ski hat over her head and goes out, you know, and gets a cab and ...

(4.3) B: 笑み (4.4) B: 笑い

例4は初対面の男性同士の会話でAはBより年上である。英語のホームドラマの前半を話しているところで、話し手がシャツの説明に困りやっとうまく表現できたときに聞き手Bは、うなずきだし、最後に"un"という「同時あいづち」を打っている(4.2)。この例のように話し手が言葉につまったり、言いよどんだりしているときにはあいづちは表れないが、最後にうまく表現できたときに必ずそれを確認する意味であいづちが打たれる(久保田, 1994)。その際に「同時あいづち」になる傾向があり、これは英語だけでなく日本語でも見られる。

ここでの「同時あいづち」は合いの手としてではなく、了解したことを相手に伝えるために使われている。

#### 4.2 表象としての「同時あいづち」

共話型の会話を進めるには、聞き手は常に合いの手をいれて話し手と一緒に会話を作っていくという姿勢を示すのが望ましい。そこで例1のように合いの手として入れるあいづちには、視線という連続行為のものより頭を上下に一度振るだけの非連続の完結型のうなずきが、さらにうなずきだけより音声を伴ったうなずきが、音節数を明確に表現しやすいので相手に対してもっとも真摯に示せる意志表示になるのかもしれない。

東山(1982)によると、日米の挨拶行動の比較では、日本人に特有な挨拶行動は「丁寧なお辞儀：手をそろえる、深々と頭をさげる」と「普通のおじぎ」であり、アメリカ人の場合は「head toss：頭を上に入れてから下におろすもの」の他、相手に接触するもので「握手」「キス」「手を握る」「抱き合う」「腕を組む」を使い分けるといふ。そして性別、二者間の距離、間柄に関係なく表れる挨拶行動は、日本人の「普通のおじぎ」とアメリカ人の「head toss」であると指摘している。

そこでこの挨拶行動から、日本人にとって頭を下げながら声を出すことは、かなり高度に習慣化されておりその行動はアメリカ人のものとは違う意味があることが伺える。また挨拶はいつ行うか予期できるものであり、一方が挨拶をしたら、他方もそれに答えることが期待されて



いる。この点からもメイナードが指摘した話し手の頭の動き付近であいづちが入りやすいことが理解できる。そしてその際に同じあいづちのなかでもより丁寧と見られる「同時あいづち」を規則的に入れることで日本語の「共話」が成り立っているといえよう。

エクマンとフリーゼン (Ekman & Friesen, 1969) は、うなずきを発話調整動作 (regulators) として、無意識のうちに使っているもので習慣化したものであると分類しているが、日本人が合いの手として使う「同時あいづち」は相手の話を促すという発話調整動作 (regulators) としての機能のほか、「共話」に参加しているという意志表示をするための挨拶行動のアイコンからコード化した表象 (emblem) 的記号としてとらえているとも解釈できるだろう。表象としての「同時あいづち」は、言語と同じように学ぶことのできるもので文化特有のものである。したがって話者は意識して言語の代わりに使うことが出来る。つまり実践上あいづちの必要性を感じた者は、日本語の文法力とは別に習得するコミュニケーション能力であるといえる。これは、アメリカ在住のアメリカ人による日本語の会話を調査した際に、日本での滞在年数が長ければ長いほどうなずきと「同時あいづち」が増加していた結果からもわかる (久保田, 1994)。「同時あいづち」は、非連続の視線行動とは異なり顕著に表現されるため、習得しやすいのかもしれない。

一般に表象は言語同様、任意に作られるため文化特有のものであるが、挨拶行動のアイコンから生まれた「同時あいづち」のようにアイコンを基にしている非言語動作は、他の文化でも記号として解釈されるが (Ekman & Friesen, 1969)、その意味付けは異なる可能性がある。

ディットマン (Dittmann & Llewelly, 1968) は、英語による会話分析から聞き手が「同時あいづち」を発するのは 1) 聞き手が話したいとき、2) 聞き手が問い、話し手が答えてくれたときにその答えを確認するとき、3) 話し手がフィードバックを得たいときだと指摘している。したがって、アメリカ人による「同時あいづち」には、話者交替としての意味付けと、話し手が求めるときのフィードバックとしての意味が強く、規則的に聞き手が入れる合いの手という意味あいは含まれていないようである。

さらにローゼンフィールド (Rosenfield, 1978) によると、話し手がフィードバックを得たいときというのは、話し手が次の四つの状況になったときである。

- 1) しぐさと相まって音声 (「ああ」) などを伴うためらい休止があるとき
- 2) 頭の動きと相まった音声などを伴う休止があるとき
- 3) 先の話しを繰り返す内容の言葉があるとき
- 4) "you know" 「～ねえ」のような向社交連鎖 (sociocentric sequence : Bernstein 1962の造語) があるとき

話し手がこのような状況になったとき、聞き手のうなずきをもっともよく発生しやすいという。そして話し手は同意を求めるとき言語だけでなく、うなずき、笑い、大きなジェスチャーという非言語動作でその情報を伝達する (Rosenfield, 1966)。

したがって「対話」を基本とする英語の会話では、話し手は、特定の状況においてのみ聞き

手からフィードバックを期待しているのであり、「共話」を基本とした日本語の会話にみられる合の手としていれる「同時あいづち」は期待されていないのである。

このように文化背景の違いから「対話」と「共話」を基本とする会話のあり方があり、そこで期待される聞き手の役割が異なることがわかった。

## おわりに

本稿では、言語と非言語の特徴を持つあいづちに着目し、あいづち行動と使用言語との関係、さらに話者の文化背景との関係について、日本に在住する日本人とアメリカ人による会話のデータをもとに比較検討した。その結果、日本人もアメリカ人も日本語で話したときの方が英語で話したときより「ええ」と音声であいづちを打ちながらうなづく「同時あいづち」が増えていることが明らかになった。5分類したあいづちのなかでとくに「同時あいづち」が言語と密接な関係にあることがわかった。

そこで実際のデータから日本語と英語で使われた「同時あいづち」を取り上げ、日本語の場合、音節の概念から合の手として入れやすい表現であること、日本人の「共話」を重んじる会話スタイルから、「同時あいづち」は、発話調整機能としてだけでなく、挨拶行動に似た表象としての機能を果たしていることを述べた。したがって「同時あいづち」は言語同様に意識して使うことができるといえる。

さらに「同時あいづち」が、使われる状況をいくつか挙げたが、「同時あいづち」が使われるべきときでも、たまたま頭をかがいたり、髪の毛をいじったりする動作が入ると、うなずきがなくなり短音声のみのあいづちになる。また逆にあくびなどが出そうになれば、うなずきだけですましてしまうことも考えられる。したがって、今後は、ほかの動作とも合わせて包括的に分析を続けていかなければならないだろう。

最近の教育分野で注目している活動にディベートがあるが、水谷（1995）は、「共話」になじんだ日本人にとっては、技術の面だけでなく意識の面でも変革しない限り、ディベートを楽しむことは難しいだろうと主張している。そこで日本語教育では、「ディベート」と「ディスカッション」の特徴をとりあわせた「デベカッション」が試みられている。今後もあいづち使用の観点から会話参加への有用な手がかりが提示できればと思う。

最後に、推測の域を出ないが、公共の場での携帯電話の使用が、日本では耳障りであるという理由で好ましくないと考えられているが、これも聞き手のあいづちが他の文化に比べて多いということと関連があるのかもしれない。携帯電話では、会話に参加している二者のうちの一人の話し方を耳にすることになるが、「対話」であれば一人（話し手）の話だけでも内容が分かり、人の話を聞いているという状況になる。しかし「共話」型の話し方であれば二人で会話を成立させているので、そのうちの一人だけの話しを耳にしても内容がわかりづらくかえって耳障りに感じられるのではないだろうか。

会話にもさまざまな目的や機能があるので、今後はそれらも考慮してあいづちの役割を考える必要があるだろう。

[データ記述の記号]

/ 確認できる発話の区切れ

(?) 発話していることは認められるが内容が聞き取れないところ

∨ 頭の縦振り1回      ∪∪ 頭の縦振り2回

[ 2人が同時に発話し始める点

\_\_\_\_\_ (下線) 2人の会話が重なっている部分

←笑い→ 笑みが聞き手の顔に浮かんでいる区間

[付記]

なお本研究は、関西大学平成7年度学術研究助成基金の助成金を受けて行われ、本稿は第26回日本コミュニケーション学会で発表したものに加筆したものである。

## 引用文献

- 荒木博之 (1985). 『やまとことばの人類学』 朝日選書
- Bernstein, B. (1962). Social class, linguistic codes, and grammatical elements. Language and Speech, 5
- Brunner, L.J. (1979). Smiles can be back channels. Journal of Personality and Social Psychology, 37 (5), 728-734.
- Burgoon, J.K., (1985). Nonverbal signals. in M.L.Knapp and G.R. Miller (eds), Handbook of interpersonal communication, Beverly Hills: Sage, 344-389.
- Dittman, A.T., & Llewellyn, L.G. (1968). Relationship between vocalization and head nods as listener response. Journal of Personality and Social Psychology, 9 (1), 79-84.
- Ducan, S. D., Jr.. (1972). Some signals and rules for taking speaking turns in conversations. Journal of Personality and Social Psychology, 23 (2), 282-292.
- Ducan, S. D., Jr., & Niederehe, G. (1974). On signalling that it's your turn to speak. Journal of Experimental Social Psychology, 10, 234-247.
- Duncan, S. D., Jr., & Fiske, D.W. (1977). Face-to-Face Interaction: Research, Methods, and Theory. New Jersey : Lawrence Erlbaum Associate.
- Ekman P. & Friesen, W. V. (1969). The repertoire of nonverbal behavior : Categories, Origins, Usages, and coding. Semiotica, 1, 49-98.
- Fries, C. C. (1952). The structure of English. New York : Harcourt, Brace & World.
- 東山安子、ローラ・フォード (1982). 「日米のあいさつ行動の記号学的分析」『記号学研究 2 - パフォーマンス : 記号・行為・表現』 北斗出版.
- 堀口純子 (1988). 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』 64号
- 堀口純子 (1997). 『日本語教育と会話分析』 くろしお出版
- Kendon, A. (1967). Some functions of gaze-direction in social interaction. Acta Psychologica, 26, 22-63.
- Kubota, M. (1991). The use of back channel behaviors by Japanese and American Bilingual Persons. Dissertation Information Service. Indiana University.
- 久保田真弓 (1994). 「コミュニケーションとしてのあいづち—アメリカ人と日本人に見られる表現の違い」『異文化間教育』 8号 アカデミア出版会 59-76.
- 久保田真弓 (1996). 「上手なあいづち」『日本語ジャーナル』 3月号 アルク 17-22.
- Kluckhohn, F., & Strodtbeck, F. (1961). Variations of Value Orientations. Evanston, IL : Row, Peterson.
- Maynard, S.K. (1986). The listener's response in Japanese and English Conversation. Sociolinguistic Newsletter, Vol.13, pp.33-38.
- メイナード - 泉子 (1993). 『会話の分析』 くろしお出版.
- 松田陽子 (1988). 「対話の日本語教育学—あいづちに関連して」『日本語学』 7巻12号 59-66.
- 水谷信子 (1988). 「あいづち論」『日本語学』 10巻10月号 4-11.
- 水谷信子 (1995). 「日本人とディベート」『日本語学』 7巻2月号 4-12.
- 水谷修 (1983). 『話しことばの表現』 筑摩書房.
- 大浜るい子, 山崎深雪, 永田良太 (1996). 「道聞き談話におけるあいづちの機能」『日本語教育』 96号 73-84.
- 岡部朗一 (1988). 『異文化を読む』 南雲堂
- Rosenfeld, H.M. (1966). Approval-seeking and approval-inducing functions of verbal and nonverbal responses in the dyad. Journal of Personality and Social Psychology, 4, 597-605.
- White, S. (1989). Backchannels Across Culture : A study of Americans and Japanese. Language Sociology, 18, 59-76.

Yngve, V.H. (1970) . On getting a word in edgewise. in M.A. Campbell et al. (eds) Paper from the Sixth Regional meeting, Chicago Linguistic Society. Chicago : University of Chicago Department of Linguistics.